

OB「会社の会議の方がラク」

塩澤教授は、独自の考えを持っていきます。「英語で討論ができれば、日本語での討論ははるかにラクにできるはず」「若い時は、一つの分野だけを深く学ぶよりも、いろいろな分野の引き出しを持つ方がいい」「社会で成功するために必要なのは、柔軟性」。

こうした考えは、活動の中に具体化されています。例えば、授業の中で必ず1回は発言しなければならぬというルール。

学生には、自分の得意分野以外の討論にもしっかりと参加することが義務づけられます。討論で発言するには、あらかじめその分野の専門用語について英語で理解していなければならず、つまり全ての学生に事前学習を促すことになります。

学生は、2年生から卒業までの3年間、週1回のペースでこの活動を経験。4年生にもなると、幅広い分野のビジネスについて、ごく自然に英語でのディベートが行える実力がついてきます。「ここでのディベートに比べれば、(日本語で行う)会社の会議の方がずっとラクですよ」と話す卒業生もいるそうです。



今日のテーマは会計学

CASE 12 ビジネスの諸分野を 英語でディベートせよ

高校までアメリカで過ごした塩澤恵理教授のもと、卒業後を見据え、英語によるディベート力を養います。

ビジネスの諸分野で使われる専門用語も飛び交うなど、現場に近い緊張感の中で、将来に必要なスキルが習得できる活動を展開中です。

向井裕也(商学部 4年)
Yuya Mukai



ここでの学びが現場に活きる



友達との会話ももちろん英語

こうしたディベート活動は、次のように進められます。まず、学生が教科書(Ian Mackenzie 著 English for Business Studies)の担当部分について調査し、これを他の学生の前で発表します。例えば「私は教科書の会計学に出てきた『エンロン』という企業に興味を持ったので、詳しく調べてきました」といった具合です。他の学生はその発表についてわからないことや気になったことをコメントし、そこから討論が始まります。

このような形式にした理由について、塩澤教授は「日本の高校生は、自分の考えを言う訓練をしていない。社会に出てからのことを考えると、意見を発表する経験を大学生のうちに積んでおくべき」と言うことでした。

また、活動に参加している学生は、次のように話します。「ここには、いろんな価値観を持った人がいます。みんなとの何気ない会話が、私には凄くいい刺激なんです」。

大学と地域を 結びつけたい



駿河台キャンパスがある神保町は、世界最大級の古書店街として有名な。実はこの地域には多くのカレー店も立ち並んでいます。学生にはあまり知られていません。そこで大学と地域を、食文化を通じて結びつけようと大友純教授の指導で始めたのが、『カレーエコMAP』制作プロジェクトです。

学生に神保町の魅力を伝えるためにはどうしたらいいかと考えた結果、「カレー店の地図を載せたフリーペーパーを作成する」というアイデアが生まれました。これには、「いろいろな場所に置いて、たくさんの人に見てもらいたい」という想いと、MAPを片手に実際に街に出て歩いてもらい、新たな街の魅力を発見してもらおうという狙いもあります。

カレーエコMAPには、神保町にある全てのカレー店を載せました。実際に一軒一軒を回って写真を撮り、お店の方に取材をしました。始めた頃は取材のやり方もわからず、例えば、事前に連絡をしないいきなりお店を訪問したため、お店の人に叱られ、後日お店に謝りに行くという事もありました。こうした失敗から、

徐々に取材のやり方を学び、学生たちは成長していきました。

カレーエコMAPには、カレー店の情報だけでなく、エコについての記事も載せています。

千代田区は、昼間人口が約88万人にのぼります。そのため、大量のゴミの発生や空調・自動車によるCO₂排出が環境に多くの負担を与えています。そこで、環境についても考えて欲しいという願いを込めてエコの記事も掲載しました。カレーエコMAPは、千代田区の数々のお店に置かれ、多くの人に活用してもらうことができました。



地図でカレー店の位置をチェック！

新聞に取り上げられた活動

さらに、もっと地域との結びつきを強めるため、ゴミ拾いのイベントも開催しました。これには大学生、企業の方、地域の方が集まりました。清掃活動を通じて、千代田区について考えてもらい、実際に街を歩くことで、千代田区のことをもっと知ってもらおうという意図もありました。

清掃の後、全員に無料でカレーが配られました。一つの鍋のカレーを分け合ったことでコミュニケーションが生まれ、さらに交流を深めることができました。

このイベントでは、告知の方法や

仕組みを実際に体験できました。新聞社に対して自分たちから売り込みその後、取材を受けて記事になり、自分たちの活動を多くの人に知ってもらえたほか、企業にも告知しイベントへの参加を促しました。「この活動を通じて、街の人とコミュニケーションを取れたことが良かったです。私たち学生は、初対面の人、特に年代の違う人と話す機会が少ないので、貴重な体験になりました。また、取材のステップも経験から学ぶことができ、社会人としての常識も身につきました」。(参加した学生)

CASE 13 88万人に届け！ MAPに込めた交流の想い

2008年、明治大学商学部3年生が東京・神保町のために立ち上がりました。

この街に立ち並ぶカレー店を掲載したフリーペーパー『カレーエコMAP』を

制作するためです。その存在をもっと多くの人に知ってもらうため、

新聞社等に売り込み、宣伝し、イベントを行いました。

森下加奈代/趙恩周(商学部 3年)
Kanayo Morishita / Eunjoo Jo